

国立民族学博物館研究報告別冊 no.003; まえがき

著者	伊藤 幹治
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	003
ページ	i-iv
発行年	1986-11-17
URL	http://hdl.handle.net/10502/3411

ま え が き

伊 藤 幹 治*

This volume presents the results of the Joint Research for the Ethnological Study of Okinawan Folk Religion, undertaken at the National Museum of Ethnology from April, 1984 to March, 1986.

Since the 1960s Japanese anthropologists have been actively involved in an ethnological approach to the study of the world of Okinawan folk religion. As a consequence of their field research many papers concerning symbolic worldview, the concept of supernatural beings, shamanism and so forth, have been published over the last two decades. Despite these continuing efforts, however, in a strict sense the overall image of Okinawan folk religion remains to be more fully clarified. Thus the Joint Research Project for the Ethnological Study of Okinawan Folk Religion was planned and conducted in view of this situation.

This report consists of seven original papers, all of which are based on the first hand data. Yoshio Watanabe discusses the variation and change in folk knowledge of the magico-religious world and advances the conceptual basis for such studies by adopting a dynamic approach to research on folk knowledge. Takeshi Matsui examines the structural relationship between ritual and oral tradition in Kurima island, and emphasizes that such a relationship amplifies the symbolic behavior of ritual itself.

Akashi Uematsu and Toshimi Shimono take up the issue of the concept of supernatural beings. Uematsu analyzes the concept in relation to *kami*, *nushi*, *futuki* and *mabui*. Shimono discusses the concept of sea deities and their wide geographical distribution throughout Japan proper, Taiwan, Korea and Southeastern China.

Mitsugu Komoto and Kohei Ogoshi examine the issue of the impact of change on the ancestor cult and village cult.

* 国立民族学博物館第3研究部

Komoto discusses the process of change and the impact of change on the concept of ancestor as well as on the ancestor cult, and Ogoshi analyzes the decline of the priestesshood system and changes in the method by which the priestess is selected as examples of the ways in which the village cult has changed.

Finally, Ryuichi Urayama describes the form of sacred groves and discusses these constructions in terms of the conditions and the form of *ibi* as their center.

この報告書は、1984年度と1985年度にわたっておこなわれた国立民族学博物館の共同研究「奄美・沖縄の宗教的世界」の成果の一部である。

戦後、南西諸島の民族学的研究が本格的にはじまったのは、1960年代前半のことである。当時、海外調査が端緒についたばかりで、その機会に恵まれなかった一部の若い世代の民族学者にとって、南西諸島は格好のフィールドであった。戦前、伊波普猷や折口信夫、柳田国男などによって研究が着手されていたが、南西諸島には未開拓の問題がおおく残されていたからである。それから四半世紀の歳月が過ぎ去ったが、その間、実地調査が活発におこなわれ、これまでに膨大な量の成果が公にされている。

そのなかでも、民俗宗教の研究にはめざましいものがある。戦前の研究をふまえて、世界観や神観念、オナリ神、先祖観、靈魂観、聖域崇拜、シャマニズムなどの諸問題が積極的に検討され、南西諸島の研究は、近年、未曾有の活況を呈している。

しかしながら、すべての問題が、理論的にも実証的にもひとしく追究されてきたわけではない。世界観や神観念、オナリ神、シャマニズムなどのように、実証的な研究が集中的におこなわれ、経験的モデルがいろいろ設定されているものもあれば、先祖観や靈魂観、聖域崇拜などのように、実証的な研究のレヴェルにとどまっているものもある。また、ひとくちに経験的モデルといっても、世界観やオナリ神のばあいのように、諸民族の民俗文化との比較にたえるものもあれば、神観念のばあいのように、本土との比較の域を出ないものもある。その意味で、南西諸島の民俗宗教の研究の水準はかならずしも一様ではない。

共同研究「奄美・沖縄の宗教的世界」は、こうした南西諸島の民俗宗教の研究状況をふまえて企画、実施された。この報告書に収録された諸論文は、いずれも、それぞれの執筆者が共同研究会で発表したあとで、あらたに書きおろしたものである。

渡邊欣雄は、象徴的世界にかかわる民俗的知識の問題を取りあげ、それがいかに変異と変化に富んでいるかをあきらかにしている。渡邊のいう民俗的知識とは、フィー

ルド・ワーカーに情報を提供する「話者の知識」ということであるが、彼は長年、実地調査をつづけている沖縄本島北部の東村で観察し、収録した豊富な資料を手がかりにして、民俗的知識の動態的アプローチの必要性を力説し、沖縄研究に新しい局面を開拓しようとしているのが注目される。

松井健は、宮古島南部の来間島の事例を手がかりにして、儀礼と口承伝承の構造的関連の問題を検討している。これまで沖縄研究者のあいだで、島の生成や宗家の創設にかかわる来間島の伝承が注目されていたが、松井は、これらの伝承が、ヤーマス・ウガンとコモン・ニガーズとよばれる儀礼と構造的に対応していることに着目する。そして彼は、こうした双方の対応関係が、儀礼の象徴作用などを増幅していると解釈しているが、この種の研究もまた、新しい試みとして注目に値する。

植松明石と下野敏見は、いずれも神観念の問題を取りあげている。これまで神観念の研究は、どちらかという、来訪神と滞在神の対立または対比という類型論が主流になっていたが、沖縄の超自然的世界は、こうした類型論によってとらえつくされるほど単純ではない。植松は、カミヤヌチ、フトウキ、マブイなどとよばれる霊的存在を取りあげ、八重山・与那国島の事例にもとづいて、それぞれの概念について検討しているが、沖縄の超自然的世界は、東南アジアなどの民俗社会におけるアニミズムの世界と似てかなり錯綜している。将来、この種の問題が積極的に取りあげられることが望ましいが、その際、比較文化論的な視点とそれにもとづく分析的な枠組みを設定することが要請されよう。下野は奄美・沖縄の竜神と海神の問題を取りあげている。そして彼は、いずれも本土や台湾、朝鮮半島、中国大陸の一部に分布していることに注目し、東アジアを視野に入れて、竜神と海神の文化史的な意味をあきらかにしている。

孝本貢と大越公平は、それぞれ先祖祭祀と村落祭祀の変容の問題を検討している。いずれも、将来、活発におこなわれるべき課題のひとつであるが、孝本は、沖縄本島北部の大宜味村饒波と饒波から那覇市とその近郊に移住した家族に焦点をすえ、系図と婿養子慣行を手がかりにして、先祖をめぐる観念と祭祀の変容過程のメカニズムを分析している。大越は、奄美や宮古の事例にもとづいて、村落祭祀の変容を検討し、その要因として女性神役の脱落やシャーマンの関与、抽籤制の導入などの諸点を挙げている。

浦山隆一は、沖縄・宮古・八重山の御嶽の形態と構成の問題を取りあげている。沖縄の島々の御嶽は、その性格上、実態が不明のまま今日に至っている。浦山は膨大な御嶽調査資料のなかから、その一部を取りあげて若干の検討をこころみているが、こ

の御嶽の問題は、長いあいだ、民族学者にとって一種のタブーであっただけに、その本格的な研究は将来の課題となろう。

この報告書には、以上のような諸論文が収録されているが、それぞれの視点と方法は執筆者によってかならずしも一様でない。主題もまたさまざまであるが、この報告書が、現在、転換期を迎えている沖縄の民俗宗教の研究になんらかの寄与ができれば幸甚である。